

令和4年度 印西市民アカデミーだより 第9号

講座9：東国三社詣

印西市の北側を流れる利根川は、江戸時代の治水事業により水路としての利用が高まり、沿岸には輸送の拠点となる河岸が設けられ、竹袋村の木下河岸もその一つとして大いに栄えました。木下河岸には、木下茶船と呼ばれる旅客の行船が設けられ、江戸からの東国三社詣(鹿島神宮、香取神宮、息栖神社)の参拝客で大変賑わいました。寛政(1789~1801年)のころには年間5,000艘もの船が利根川を下ったといわれます。本講座では、木下茶船にかわりバスで利根川沿いの道を下りながら現代版東国三社詣を体験しました。コースは、市役所→香取神宮→鹿島神宮→息栖神社→佐原道の駅→市役所(9:00~17:00)です。



木下茶船(木下交流の杜歴史資料センター展示)

香取神宮と鹿島神宮は、古来深い関係にあり、「香取・鹿島」と並び称される一对の存在です。その真意の背景には、両神宮が軍神として信仰されたことにあります。古代の関東の東部には、香取海という内海が広がっており、両神宮はその入り口に扼する地政学的重要地に鎮座しています。この香取海は、ヤマト政権による蝦夷進出の輸送基地として機能したとみられており、両神宮は、その拠点とされ、両神宮の分霊は朝廷の威を示す神として東北沿岸の各地(鹽竈神社他)に祀られました。



国譲りでの武甕槌大神と経津主大神

藤原氏の崇敬も強く、藤原氏の氏社として創建された奈良の春日大社では、鹿島神が第一殿、香取神が第二殿に祀られています。中世、武家の世になってからも武神(鹿島大明神・香取大明神)として信仰され、源頼朝や足利尊氏の寄進を受けています。両神宮は、毎年朝廷から勅使として「鹿島使(かしまづかい)」「香取使(かとりづかい)」の派遣があり、極めて異例です。関東以北の人は、伊勢に参宮した後、禊の「下参宮巡り」と称して三社を参拝しました。



改修が終了した鹿島神宮の奥宮

現在、鹿島神宮では令和の大改修(拝殿・幣殿、奥宮、楼門)が行われており、拝殿の檜皮葺の屋根の構造が観察できます。香取神宮では、勅使門の檜皮葺の屋根の改修が終了し、芸術的な曲線美が堪能できます。息栖神社では、周辺の観光施設の整備計画が進んでおり2年後の完成が楽しみです。一度は訪ねてみたいパワースポットです。



日本三霊泉の一つ「潮凧井」